

ゲイ・コミュニティ／ゲイ・カルチャーの映画を 大学で上映すること

日時:2023年9月28日(木)
場所:専修大学神田キャンパス

【話し手】川野邊修一 【聞き手】宮本文

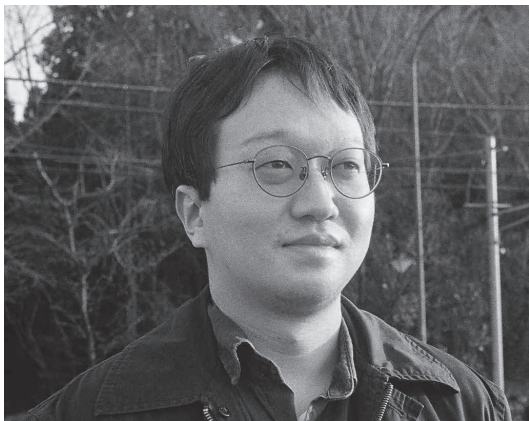
■川野邊修一氏プロフィール

1991年5月7日、東京都江戸川区出身。法政大学情報科学部デジタルメディア学科卒業。映画美術学校第16期中等科フィクションコース・第10期アクターズコース卒業。大学卒業後は都内で会社員として勤務を続ける傍ら自主映画を製作。監督作品『凧』(2017)は21st CHOFU SHORT FILM グランプリ・SKIPシティ国際映画祭入選。新作『ボクらのホームパーティー』(2022)は大阪アジア映画祭2022・第30回レインボーリール東京に入選。また、主演を務めた短編映画『泥人』(2013)は、2014年調布映画祭グランプリを受賞。『ボクらのホームパーティー』公式HP:

<https://bokupa-movie.com/>

かつての教室を振り返る

宮本文(以下、宮)……2023年11月11日に専修大学で「これからの多様性の在り方について～川野邊修一監督×今井ミカ監督作品上映会+監督対談」という企画を行います。それに先立ち、本日(2023年9月28日木曜日)川野邊監督をお迎えして、ゲイ・コミュニティ／ゲイ・カルチャーを描いた映画『ボクらのホームパーティー』を中心に、まずは川野邊監督自身のコミュニティ探しについてから伺って行きたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。



川野邊監督(以下、川)……どうぞよろしくお願いたします。

宮……映画『ボクらのホームパーティー』の冒頭は男女の大学生の家飲みから始まります。そこで友人男性から智也は恋愛の話を振られますが、当然のように異性愛の規範を前提として話が進められます。智也は相槌を打ちながらも、その視線は自分の何かを消しているような印象を受けました。監督は学生時代、教室などで自分の存在がカウントされていないという気持ちを抱いたことはありますか。

川……まず、普通に小・中・高で性教育やその一環で男性同士が好きになるということを教えてもらった記憶が正直一切ありません。子供ができるというのもやはり男女に限った話になるので、そもそも男性同士の性行為は基本、教室では扱われなかったです。なので、無意識的に「そういう人たちはいない」イコール「なんか自分もない」みたいな、そういう感情が結構強かったと思います。同性愛とか、自分はゲイであるということが無意識的に隠していたところがありました。

宮……小・中学生では学校外に同性愛についての信頼できる情報を求めることは難しかったと思うのですが、最初はどのようにしてそのような情報へアクセスしたのでしょうか。

川……中学生の頃はもう携帯電話があったので、自分で調べようと思えば調べられる時代ではありました。小学校の時は、そもそも同性愛という意識がすごく薄かったです。実際、男性の友達と一緒に遊んでいる中ですごく近くにいたり、手を繋いだり、キスをしたりしてはいたのですが、それが何なのかというのは意識的にわからなかったです。だから、小学校の時は特に何も気にせず接していたとは思いますが。

宮……いま振り返られて学校生活で性教育も含めてこうだったらよかったのと思うことはありますか。

川……まず、実際にゲイだという人が周りにいたら現実として違ったのではないのでしょうか。

宮……例えば先生などでしょうか？

川……先生もそうですし、授業の一環でゲイの人が学校に来て話してくれるとか。小・中学校では結構難しいとは思いますが…。

宮……難しいけど…ですよね。

川……小さな子どもたちに対して、ただ「男の人同士で好きなんだよ」ということを言ってくれる人がいるだけでも、それだけで現実が大きく変わってくると思いますし、その子の中の世界観とかコミュニティーも多分大きく変わってくると思います。

ゲイ・コミュニティー、新宿二丁目へのアクセス

宮……『ボクらのホームパーティー』でも大学生智也が冒頭のシーンの後、警戒心と心細さを全開にしながらかるい様子で世界有数のゲイ・コミュニティーである新宿二丁目に足を踏み入れています。実際の川野邊監督のゲイ・コミュニティー探しについてお聞かせください。

川……僕はずっと東京にいたから、かなり恵まれている方ではあったと思います。それこそ昭和の時代とかだと、高校生か早ければ中学生が雑誌とか見て一人で新宿二丁目へやってきて、ゲイバーを探しに来ていたそうです。僕が初めて二丁目に足を踏み入れたのは20歳か21歳の時でした。その時、大学生で映画の制作会社のインターンをやっていて、映画撮影が終わった後によくしてもらっていたその会社のプロデューサーが新宿の街を色々案内してあげると言ってくれて、最初はゴールデン街へ行きました。何軒か回っていると、あの有名な「脚本家」の人がいるお店とかあったりして、「なんか新宿ってすごい街だな」と思いました。その次に行ったのが新宿二丁目だったのですよね。今はもうないのですが、「洋ちゃんち」というゲイバーがあって二丁目ではかなりの老舗のバーで、そこへ連れて行ってもらいました。

僕は当時、特に自分はゲイだと認められていませんでした。大学3年生だったのですが、卒業したら普通に結婚するのだと漠然と思っていました。でも、

女性と付き合ったことがほぼなくて、キスとか性体験とかもなかったので、漠然と自分はどういうふうにと付き合っていくとかがあっていうのを考えずにずっと生きていて。でも心のどこかでは、男性と手を繋いだりしたいとか、キスしたいというのもずっとあって、そんな中でプロデューサーの人にゲイバーへ連れてってもらったので、「本当は(自分のセクシュアリティを)知っているのかな」と思いつつ、何の気なしに行きました。洋ちゃんもその僕を見て、別にゲイとかゲイじゃないとか判断して言うてくるでもなしに、普通に二丁目の歴史を淡々と語ってくる感じてした。

「だからそこまでそんな気にしなくてもいいのかも」と思えました。実際その洋ちゃんちというお店は色々な芸能人たちも来るお店で、ゲイの若い子が悩んで来る駆け込み寺のような一面を持っていたりするぐらい、色々な人の話をすごく聞いてくれるところでした。

宮……『ボクらのホームパーティー』に出てくるゲイバーのママ将ちゃんは、当時の監督の分身でもあるとご自身でも言われている智也が恐る恐る初めて二丁目に足を踏み入れた時に、さりげなさや世話焼きの絶妙なバランスで、二丁目のコミュニケーションの流儀を優しく教えてくれるキャラクターでしたが、洋ちゃんは将ちゃんに反映されていますか。

川……そうですね。将ちゃんに洋ちゃんの要素が入っていると思います。洋ちゃんはすごくドンと構えて話を聞いてくれるのですが、悩みとして実体験を話しているとかすかに笑いながら頷くみたいなところがあって(笑)。今思えば、昔の自分を見ているような感じがして笑っていたのでしょう(笑)。無意識でしたが、映画の中に洋ちゃんの要素は結構入っていましたね。

宮……『ボクらのホームパーティー』では、ゲイ・コミュニティーの決して一枚岩ではない豊かなコミュニケーションの蓄積であるゲイ・カルチャーが描かれていました。監督は新宿二丁目に行ってから、言葉遣いやコミュニケーションの型や方法は変わりましたか。

川……いや、僕は全然話し方は変わりませんでした。いまだにノンケっぽいねとか言われます。新規のゲイバーへ行くと大体、ノンケさんだと思ったと言われます。そこら辺は昔から変わりません。

意外に二丁目でもゲイバーのママがいわゆるおネ

エロ調で話すだけで、お客さんはみんな普通な感じで話しています。多分、ママとしては場を盛り上げる意図があると思います。ゲイバーはお酒を飲んでもらわないとお金にならないというところがあるので、ビジネス的なものも含めておネエっぽい口調になるというのもあると思います。

視線のコミュニケーションの発達

宮……ゲイバーに誰かが入っていくと、そこにいる人たちが一斉に入って来た人をゲイかゲイではないか判断するという話がありましたか。

川……ゲイの人は小さい時から周りの視線をすごく気にして生きています。その感覚が多分染み付いているのだと思います。小・中学生ぐらいまではやはり自分がゲイであるとばれたくないし、ゲイだと言われたくないから、周りの視線をとてども気にする習性が身に付いてしまいます。それが高校ぐらいになると、自然に危険を察知できるようになってきます。またゲイであることに対して自分の意識の中で少し余地が生まれてくるので、周囲を窺う視線は、高校から大学にかけてくらいで、少しずつお互いに仲間がいないかとか探る視線になってくる気がします。

宮……危険察知からもう一步進むのですね。

川……一步進んで恋人を探す視線ですね。大学生の年齢になり普通にゲイの友達ができるようになると、視線の駆け引きがある種のコミュニケーションとして成立して、お互いの共通認識みたいになってくるのだと思います。

宮……『ボクらのホームパーティー』でも視線の絡み合いが場を生成する重要なコミュニケーション・ツールだと感じました。映画というメディアをフルに活かした描き方だったと思います。

川……そうですね。僕が今回のこの映画を作ろうと思ったきっかけは、自分が大学生の頃、初めてゲイの友達が何人かできてきたぐらいの時に友達に誘われて行ったホームパーティーでした。その時のことがすごく記憶に残っていて。映画にもあるのですが、その時に僕がホームパーティーのお家に行ってリビングの扉を開けた瞬間に、先にリビングに居た人たちが一斉にじろりと僕を見てきました。それこそ下から上まで見られて品定めされているみたいな感じだったの

で、これは一体何なのだろうと思っていました。

その後、自分が自己紹介している時にも僕の人を見て話してくれる人もいれば、僕の方をまったく見ないでおそらく気になっている隣の人を見ながら話を聞いている人がいる。そういうコミュニケーションがすごく面白いなと思いました。

自分が発している言葉のコミュニケーションだけでなく、視線のコミュニケーションがここに存在しているのだと思いました。さきほど話したように、小・中・高そして大学生になるにつれて、そういったコミュニケーションが段々と上達していき、大人になるとそういった視線のコミュニケーションが一つの言葉みたいな形で当たり前のように自然に駆使されているというのに気づき、「これはゲイとして生きてきた一つのルーツにあたる」とさえ思いました。その記憶が強く、これを映像でとらえて映画にしたら絶対すごく面白くなるのではないかと考えていたので、『ボクらのホームパーティー』は視線の映画にしようと思い始めました。

悲劇がすぎれば喜劇になる

宮……『ボクらのホームパーティー』は視線の文法的なものも含めてリアリズムだと思う一方で、コメディ的な要素がすごくあり思わず笑ってしまうシーンがたくさんありました。実際に映画祭などで上映された時には観客がずっと爆笑していたとお聞きしました。コメディにするという意図はあったのでしょうか。

川……悲劇が過ぎると喜劇になるというのがあって…。

宮……それは実際の二丁目の経験をベースに培われたのですか。

川……何ですかね。昔から結構そういうところがありました。喧嘩だったり、なにか辛い出来事があったりすると、それを一周通り越して笑ってしまうみたいなシニカルな気分がずっと自分には昔からありました。小学校の頃も、学校の先生が怒っているとその先生の心の裏を想像して面白く思えてしまうとか。

普段人間は話したくても話せないこと、言いたくても言えないことがすごくたくさんあります。今回のこの映画のホームパーティーに関して言えば、僕はシナリオを書くといつも必ず映画の学校の友達何人かに

見せるのですけど、見せた友達の一人から「本当に普通のホームパーティーだったら、それは映画として面白くない」と言われました。「この映画はフィクションだから、フィクションでしかできない展開であると思うし、本当に日常に起きていることだけを描くのがいいとは思わない」と。

確かにその通りで、最初のシナリオで描いていたのは、本当にリアルな、表面上だけのホームパーティーで夜が終わっていく話だったので、登場人物たちの内面が一切吐露されないものでした。

宮……その時点ではコメディだったのですか。

川……その時点では普通にドラマでしたね。そこからシナリオを練り直した時に、実際にホームパーティーに参加した時に、自分が言いたかったことや、言えなかったことがたくさんあるなと思い返しました。例えば、友達みんなで円になって飲んでいる時に、「右隣の二人は膝枕をしているけれど、本当に二人は友達なのだろうか」とか。口に出したいと思うのですが、実際に色々な人もいるから言えません。後で他の人に話を聞いたら、「あそこは付き合っていないけれど、昔ちょっと関係があった」とか、「どちらかは好きなんじゃない」とか、そういう話は出てきますが、実際にそんなことも、視線のやりとりから探るのも面白かったです。だから、映画ではその視線から探りつつ、各キャラクターの心情、本音の部分が出てくるような展開にしようと思いました。

かつ、映画は観客だけが知っているという視点があって、そこは面白いと思います。実際、映画の中で7人がどういバックグラウンドを背負っているかということをして把握しているのは、実は観客だけなのです。

映画を二部構成にしたというのも、そういうところが大きいです。最初、前半では「こういう人たちを集めました」と観客に提示した上で、後半では観客も一緒にホームパーティーに参加して、展開をゆっくりと楽しんでもらう形にしました。見ているうちに気づいたら、ホームパーティー中に参加しているような感覚に陥ってほしいと思って。



宮……ネタバレになるのであまり言えませんが、確かに最後には参加メンバーの中に自分が入るような気になりました。「観客しか把握できない」という視点は、今までの映画製作でも意識的に導入されていましたか。

川……前の短編映画「凧」を作った時も、「見る／見られている」という関係を意識していました。「凧」は女子高生2人組の話で、片方が失踪してしまい、数年後失踪した方から主人公の女の子に電話が来る話です。警察から事情聴取もあったり、途中で何回か回想シーンが入るのですけど、その回想シーンを見られるのは観客だけです。色々ありつつも、結果全てを知っているのは観客だけ、真相を知るのは観客だけという仕掛けにしました。

セクシュアリティをオープンにしないで 製作した「凧」での出来事

宮……「凧」の話が出たので、ゲイであることと、映画監督であることが監督の中でどのような関係性を結んでいるのかお伺いしてもよろしいでしょうか。監督は、最初からゲイということオープンにされてゲイ・コミュニティの映画を撮ってきたわけではないとお聞きしましたので、その辺の経緯など伺えないでしょうか。

川……元々、『ボクらのホームパーティー』を作ろうと思ったきっかけの一つでもあるのですが、「凧」を映画祭に出した時に、審査員の方に女子高生の同性愛的な描写を中年男性(監督)が描くことに嫌悪を感じると言われたことがありました。「凧」の中では、女子高生同士が顔を近づけてメイクをしたり、普段から寄り添って話したりする場面が出て来ます。実際

女子高生同士ではありうるだろうというちょっとした描写で、一種、思春期特有の感情の揺らぎみたいなものを描きたかったのです。はっきりと同性愛だから「好き」みたいなものではなく、この感情は「好き」かどうかわからないけど何か気になってしまう、というのをねらいました。

その映画祭で「凧」はグランプリを取ったので講評の映画評を長めに書いてもらったのですが、その審査員の方に映画評の中で、中年男性がそういうを描くことによって嫌悪感を感じたことも事実だと言われました。正確には(映画評を引用して)「作り手が中年男性だと知ったことにより、違和感や嫌悪感を覚えてしまうこともある」と。

宮……その方は女性の審査員ですか。

川……その方はトランスジェンダー男性の方でアーティストの方でした。

宮……その時、その方と面識はあったのですか。

川……元々知っているとかではありません。事前に審査員がどんな人か聞いていたので、トランスジェンダーでLGBTQの活動を熱心にされているような方も審査員にいるのだなと思っていたら、講評の時にズバツと言われて…。

今思えば、その時点では僕がゲイだとセクシュアリティを公表していなかったもので、この監督は何で女子高生同士のそういうものを撮っているのだろうという違和感もあったのだと思うのです。

宮……その講評の中で言われた「中年男性」は、おそらくヘテロ(異性愛)の中年男性を意図しているのでしょうか。

川……多分。

宮……ヘテロの中年男性が女子高生の同性愛的なものを消費していると思われたのでしょうか。

川……そうですね。実際僕もそういうひっかけはあって、その気持ちはすごくわかります。そういった女子高生を消費させるような映画は、もう終わらせようと思いました。中年男性がそういう「女子高生もの」、ある種の百合に近いようなものを作るというのが当時かなり沢山あったので、もうそれを終わらせよう。

宮……それはそのムーブメント自体を終わらせなくてはならないという決意だったのでしょうか。

川……はい。なんかよくないと。女の子たちだけがキラキラかわいいというのは、作品として別にそのままでは面白くないです。アイドルも多分似た形で消費されている側面があると思います。でも、それって映画なのかなって思ってしまう。実際そういうのがすごくヒットしたりするのは知ってはいました。

ゲイであることをオープンにして製作した『ボクらのホームパーティー』

宮……その終わらせるという気合いが『ボクらのホームパーティー』とどのように繋がっていったのでしょうか。

川……審査員の方にそう言われて結構ショックだった一方で、確かにその方が言っていることもわかりました。そして、何となくモヤモヤした感情をお互いに抱いて、表現したり批評されたりするということのやりづらさみたいなものも感じていました。

宮……それは、審査員との関係性に限らずということでしょうか。

川……審査員の方も僕に対して何か直接言いづらいみたいな雰囲気もあったと思います。その時は自分はゲイだと思っていましたが、そのことは本当に近い友達にしか言っていませんでした。映画祭の時にもあまり大っぴらに話しづらい雰囲気でした。

それで映画祭の打ち上げで居酒屋に行った時、「実はゲイなんですよ」と言ってしまいました。みんなもワイワイしていたし、飲み場だったので、何となくいいかなと思ひました。その時にその審査員の方もいらしたのですが、それを聞いても結構あっけらかんと「あらそうなの」と。「次はゲイの作品だね」と軽い感じで流されました。僕としては映画評がショックだったのでその弁明みたいなところがあったのですが、かなりあっけらかんとされて(笑)。

宮……「凧」の時に役者さんにゲイであることを話していましたか。

川……いや、言っていません。映画が完成してその翌年ぐらいに言いました。「もっと早く言ってよ」みたいに言われました。

確か「凧」を作っていた時、僕が役者さんに対して「顔近づけてください」とか演出するのにも、自分がゲイであると公表しているのといないのでは、おそら

く演じる側の安心感も違ったと思います。やりづらさもきつとあったと思います。僕の方としても、自分の意図した演出のねらいを100%は話せなかった気がします。

そんなことがあって、自分がゲイであると言えないことが、今後自分が映画を作ったり何か創作をしたりしていく中で、必然的にやりづらさに繋がってくる気がしました。

言えないことがどんどん積み重なっていく中で作品を作っていくのは、とても窮屈ですし困難もあると思います。だから、『ボクらのホームパーティー』では自分のセクシュアリティをオープンにして、そうした上で自分の気持ちや考えをきちんと伝えるということを念頭に置いて、映画を製作しようと決めました。

宮……『ボクらのホームパーティー』のパンフレットでも、「川野邊監督の実体験に基づいて」とはっきり書いてあったのもそんな気持ちの表れの一つでしょうか。

川……そうですね。今までは色々自分の気持ちと向き合っていないことが多かったのですが、この映画はちゃんと自分と向き合って作ろうという強い気持ちが確かにありました。自分のセクシュアリティに対して、そうですし、きちんと何かを伝えるということに対して、この映画では自分ときちんと向き合って作るということ意識して、実際に向き合いました。

ワークショップ・オーディションにて

宮……オーディションの時のことを伺ってよろしいでしょうか。役者さんはゲイか否かで選んでいるわけではなかったとお聞きしたのですが。

川……オーディションの時にゲイであるかそうでないかは選考に関係ないということを事前に伝えていました。また、セクシュアリティを僕が無理に聞くこともないし、別に言わなくていいことだと。

設定としてメインキャストはみんなゲイだけれど、重要なのは人間の内面的な本質的な部分でその役を演じることができるかできないかだから、セクシュアリティがオーディションをする上でものすごく関係しているわけではありません。なので、オーディションを受けに来た人には、ゲイだからと言ってキャストイングすることはないということと、「おそらく、みなさんゲイのイメージとか固定観念あるでしょうが、今回メイ

ンキャラクターが7人いて、それぞれかなり違ったキャラクターですので、それにハマるかハマらないかでキャストイングします」ということを伝えました。

また、「僕は自分のセクシュアリティをゲイだとオープンにして作りますけれど、役者さんやスタッフがセクシュアリティを公表するかしないかは本人に任せます」と伝えてありました。

オーディションは4日間で毎日20人～25人ぐらい集まりました。毎日、実際のオーディションに入る前に、最初にみんなで輪になり、ホームパーティーみたいな感じでまず一巡目は自己紹介をしてもらいました。二巡目で「自分が思うゲイの人はどんな人ですか」、「実際周りにどんなゲイの人がいましたか」という質問を一人ずつ答えてもらいました。もちろん僕自身も答えます。順番に聞いたので、みんな前の人と意見が被らないようにしようという工夫があったのかとは思いますが、答えは本当に人それぞれでした。ウォーミングアップの意図としては、その場で出た意見と同じように、ゲイの人も色々な人がいますというのをまず知ってもらうということで、それを経てからオーディションに入って行きました。

宮……その後の実際のオーディションはどのように進んだのですか。

川……オーディションは、2人芝居と6人芝居のパーティーのシーンを1部抜粋する形でやりました。2人芝居は、映画の序盤に出てくる大学生智也とその友達の、初々しい2人組のシーンをやってもらいました。その後智也がホームパーティーに初めてやって来て、6人が輪になって自己紹介をするシーンをワークショップ・オーディションでやりました。

募集をかけた時は10人ぐらい集まるかなと思っていたら、結局毎日20人とか25人とか来たので、1日4時間の時間配分でやりました。それでも時間が足りなくて。ホームパーティーのシーンはリハーサルだったら、3~4時間ぐらいかけてやるところを、ワークショップ・オーディションでは時間も限られていたので一組20分とか30分でやってもらいました。台本もその時初めて見せて、最初は台本を見ながらセリフだけ言ってもらい、リズムが何となく掴めてきたら少しずつ台本を見ずに掛け合いをやってみましょうという感じで進めました。

宮……誰がどの役をやるというのはその場で決めたのですか。

川……ウォーミングアップの自己紹介の時に僕が「何となくこの人はこの役」と決めました。だから、オーディション中はずっと頭をフル回転させていました(笑)。

一人ひとりのセリフはそこまで長くはないので、どんどんみんなセリフを覚えていって。じゃあ、セリフを渡せるようになったら、次は視線でお芝居してみましようといった具合に。次のセリフの人に目配せしましょうとか、セリフの掛け合いしている人は目を見つめてセリフを渡してみましようとか、中にはセリフを飛ばしちゃう人もいるから、そういう人がいたら視線で渡してあげましよう、という具合に視線のワークショップもやりました。

宮……視線のワークショップ、面白いですね。

爆笑しっぱなしの映画祭での観客

宮……次に観客の反応についてお話を聞いていきたいと思います。今回大学では初上映ということですが、『ボクらのホームパーティー』はこれまでどのような場で上映されてきたのでしょうか。

川……国内の映画祭では3回上映されました。映画館だと東京・新宿のK's Cinemaで3週間。2023年1月から大阪のシアターセブンで1週間。東京以外は大阪を皮切りに、3月に名古屋の名古屋・シネマスコアで、5月に京都の出町座で、6月にまた愛知の刈谷市刈谷日劇で、7月には青森の八戸で一日だけのイベント上映がありました。2023年11月に東京のCINEMA Chupki TABATAで上映が決まっています。

宮……上映ごとに反応の違いなどありましたか。

川……映画祭だとレインボー・リール東京(東京レズビアン&ゲイ国際映画祭)という映画祭が2022年7月にあって、東京での初めての上映でした。なおかつ、LGBTQ系の映画祭だったので、反応がすごく楽しみでもある反面、少し怖かったです。受け入れられなかったら、もう終わりだと。

会場は300席程度の青山のスパイラルホールだったのですが、蓋を開けてみると多分200とか250人ぐらい来てくれました。観客が集まったというのにもか

り嬉しかったのですが、上映が始まって、パーティーシーンに入るぐらいから終わりぐらいまでずっと爆笑が続いたそうで、それも嬉しかったです。

僕としても悲劇は喜劇として笑って楽しめるような映画を作ったつもりでしたが、爆笑になるとは思いませんでした。キャストとも「これってコメディ映画なのか」と言っていました。映画が終わった後もロビーに人が大勢留まってくれて、それぐらい活気がありました。やはり映画祭ならではの熱気というものがありますね。

宮……来ているお客さんは映画関係者が多いのでしょうか。

川……多分半分ぐらいゲイの人だと思います。みんな半袖短パンでガチムチみたいな人が多かったの。またゲイの人だけじゃなくて、トランスジェンダーの方だったりレズビアンの方だったり色々な層の人たちが見に来てくださって、皆さんすごく和気あいあいと感想を言い合ったりしていました。

その一方で、映画館はLGBTQに特化した空間ではないので、映画館の上映で笑いが起きることが本当に稀です。

映画館での観客の反応

宮……そうなのですか。確かに日本の映画館でコメディ映画を観ていても笑いが起きた記憶がありません。

川……アメリカだったらどうですか。

宮……笑いが普通に起きると思います。

川……日本はやはり結構周りを気にしているのでしょうか。映画館で上映した後、すごく笑いたかったとか、笑いをこらえていましたとか言ってこられる方が本当に多いです。

宮……それは東京でも大阪でも同じでしょうか。

川……大阪もそうでした。どの映画館もそのような感じてした。

ただ、舞台挨拶やトークイベントをすると、上映が終わった後に監督である僕と話がしたいと言って来てくれる人が多いです。しかし、劇場の上映とレインボー・リールのような映画祭とは少し違って、映画館上映の後には一人ずつ並んで、一人ずつ僕にこそっと話しをして、「実はゲイで」とか、「実はレズビ

アンなんです」とか打ち明けてくれる感じです。それ
もとても嬉しいのですが、並ぶので中には待ちきれ
ずに帰ってしまう方とかいてそれは残念でした。

名古屋で上映した時にパンフレットを購入してくれ
た観客の方たちにサインをして話すという会をしまし
た。その時も大勢並んでくれました。その中で「実は
レズビアンなんです」と声をかけてくれた女性の方が
いました。「実は結婚していて、旦那がいて、旦那も
すごく好きなんだけれども心の中ですごく悩んでいて、
でも、映画を観て自分以外にもこんなに悩んでいる
人がいたのかと思って嬉しくて涙が出ました」と言っ
てくれたのがとても印象的でした。

ゲイのホームパーティーの映画を作ったけれども、
ゲイの人だけじゃなくて色々なセクシュアリティの人に
響いたっていうのも嬉しかったし、面白く感じていま
す。ただ、やはり一人ずつ話すという状況がちょっと
切ないです。個人的には恋バナ(注:恋愛話)がすごく
好きなので、なんかもうセクシュアリティとか性別とか
関係なしに、みんな輪になって恋バナしようよ!と(笑)。
宮……恋バナのワークショップですね(笑)。

川……しかし、そういったことができるのはまだまだ
先なのだろうとは思っています。だから一日でも早くそ
ういう感じで色々な人と恋バナができる日がくればい
いなと思っています。

気軽に話すには時間を要す?

宮……自分のライフステージや置かれている環境も
ありますが、いま一般的に恋バナは昔よりしにくいよ
うな気がします。それは性的マイノリティのセクシュ
アリティやジェンダーの問題と日々見える形で向き合う
機会が増え、異性愛の規範が当たり前ではないのだ
と気付かされるようになってきたということも関係
があると思います。メインストリームの恋バナが当
たり前に想定してきたことに対する反省として、個人
的にはコミュニケーション・ツールとしての恋バナ的な
ものを意識的に封印する場面が続いています。

川……気軽に話せないということでしょうか。

宮……そうです。ただ、先ほどのお話を伺って、き
つとそういう状況がずっと続くというよりはむしろいまは
学習過程なのかと思いました。

川……僕はオープンに何でも話すからいいのです

が、気を使って話される方がしんどい時も正直あつた
りします。「これ聞いたらあれだからなあ」とか言っ
てきて、「何でも聞いて」と言ったら、「セックスとかど
うやってするの」と聞かれるなどそういうことがありま
す。失礼だと思ったらこちらからきちんと伝えるので、
僕は相手を傷つけるようなことでなければ、思ったこ
とは言ってもらうのが一番だと思っています。

言わないで済ましてしまう時代に

川……今それができていないのが一番問題なの
ではないかなという気がします。それはSNSの普及も
関係していると思います。言いたいことと言えないこ
とを比べた時に、言えないことの方が多すぎる、対
話ができてないというのをすごく感じます。

僕自身もLGBTQに対して本当にきちんとした正
しい理解や関心があるかという、多分間違っ
たことか言ってしまうと思っています。特にLGBTQに
ついての理解はアメリカがはるか先を行っていて、日
本は遅れています。どうしてもアメリカの一步、二歩ぐ
らゐの遅れた情報でしかコミュニケーションできない。
だから、僕も完全に正しい知識を持っているとか理
解がある前提で話しているというより、自分も間違っ
てしまうことが絶対あると思っています。そして、間
違えてしまったら謝るし、間違っていたら言ってほし
いと。そうしてでも、とにかく自分が思っていることだ
けは伝えたい、それだけでいいと思っています。

宮……言わないで済ませてしまうのが問題である
というのは実にその通りだと思います。確か映画のパン
フレットに寄せられていたコメントの中でも、今どき
は映画のホームパーティーのシーンのように言葉をぶ
つけ合ったりはしないというのがあったと思います。

川……それこそSNSの比重がすごい大きくなっ
ているからだと思います。僕はあんまりSNSとか、キラキ
ラした生活とか興味ないのですが、今の若い人たちは
SNSで自分たちの立ち位置がどこにあるか、その
立ち位置が決めるヒエラルキーに重きを置いている
ように思います。そうなると「この前ね、こういう
ところに行っね」と話出すというのがまずなくなっ
てきて、対話をするというよりは「SNS見たよ。すごい楽
しそうだったじゃん」で話が終わってしまいます。どん
どん会話なく過ごせるようになってしまっている気がし

ます。思い出とか出来事の共有はしやすくなったけど、考えとかを感情とかは共有しづらくなったのではないのでしょうか。

大学で上映する意義

宮……上映場所で反応が違うという話が先ほどありましたが、今回大学で上映することについてどのように捉えられているのかお聞かせください。

川……大学生に見てほしいというのがずっとあり、キャストともどうしたらいいのかなと一緒話していました。大学の学園祭で上映するのがいいのではないかと案とか、大学の授業の一環で上映してもらうのがいいのではないかと、そんなことを丁度話していたので、専修大学で上映をするお話いただいた時に本当に嬉しかったです。

大学生に見てほしい理由の一つとして、まず若い人に見てほしいというのがありました。この映画が完成して初めての試写を見終わった時、ぱっと思ったのが高校生の時の自分にこの映画を見せたかったなということでした。

高校生の時は友達に好きな子がいましたが、でもずっと言えなくて。その友達は女の子と付き合うようになり、それを影で応援するみたいな感じてました。その時の自分はかなり卑屈で、自分はもう恋愛できないとか、好きになったら駄目だという気持ちがありました。そんな時にこの映画を見ていたらもっと視野が広がっていたかもしれないなと思えて。確かにパーティーシーンでは喧嘩もしていますが、でもその喧嘩ですらうらやましいなと思ったのではないのでしょうか。傷つけ合うってことすらもう一生ないと思っていましたので。

「いま置かれている身の回りの環境だけが世界ではないし、そこだけに縛られる必要はない、もっと広い世界が広がっているから大丈夫だよ」と、若い人たちにエールを送る気持ちの映画なので、やはり若い人に見てほしいという思いがあります

もう一つの理由としては、今の若い人たちの考えなどをもっと知りたいというのがあります。昔に比べると、確かに時代が変わってきているとは思いますが。例えば、昔よりは自分はゲイだとオープンに言えるような時代にはなっています。しかし、それ以上に自

分より若い世代の人たちはもっとセクシュアリティに対する考えや価値観を大きく変えてくれると思っています。僕は自分たちが想像できなかったらう世界観を、下の世代たちが作ってくれるだろうと信じていますし、それにとっても興味があり見てみたいです。

だから、多くの若い人に映画を見てもらって、自分の言葉で世界観を語るきっかけになってほしいです。自分はこんな考えを持っているということを色々な人と話してもらいたいです。その過程でおそらく色々な考えも生まれてくると思います。ゲイとかレズビアンとかそもそもセクシュアリティが関係ない時代というの、もしかしたらやってくるかもしれない。そういったこともすごく楽しみです。いや、自分もまだ若いと思うのですが(笑)。

宮……学生たちと日々接する教員をしていると、特にセクシュアリティやジェンダーに対する感覚が年単位で変わっていているなと感じます。

川……そうですね。

理解できないことがあることに気づく

宮……今度は話しづらいところですが、ネガティブな反応についてお聞きします。今回、上映企画を進める過程で、「ゲイ(・コミュニティ)の映画」という理由で思いもしなかった反応に遭遇しました。企画を進めるにあたり、自分とは違う意見があることを通常よりも覚悟していたつもりでした。が、一方で大学教員は程度の差こそあれリベラルだと思っていましたので、自分の世界の見方がとても甘やかなものだったとショックでした。

ただ不思議なことに、「ショック」というのは決してネガティブなだけの体験ではなかったとも思っています。ある物事を知ってもらおうと言葉を尽くして説明をして、その上で、できれば説得したいけれどもできないことも多々ある。そういう中で、今できる最大限のことを探ろうという気持ちに切り替かわる瞬間が自分の中で何度も生まれ、それがとても貴重な経験でした。一見ネガティブな反応も引き出しつつも、それに耐えうるような魅力がこの映画にはあると思います。

川……実際に制作している中であったのは、前に勤めていた会社の上司に飲み屋さんで映画のチラシ渡したら、僕はこれ受け取れないと言われたことがあり

ます。

直属の上司ではなく、たまに会うぐらいの人だったのですが、その理由としては、「僕には娘がいてこのチラシを受け取ったら家で娘が見て、娘が色々と考えちゃうかもしれない。だから受け取れない」と言われました。それを聞いて「なんで」と心の中で思いました。でも、多分ご本人としても自分のセクシュアリティに戸惑って考えてしまうこともあるので、だからそこを子供に考えさせたくないというのが本心だったのではないのでしょうか。

宮……その上司の方は、頭の中に思い浮かんだことをそのまま言葉にして説明してしまう、ある意味とても正直な人ですね。

川……そうですね。僕は驚いてしまって、「なんで」と口に出して否定することもできず、「そうですか」とだけしか言えなかったです。しかし、確かにそれが結構現実なのではないかとも思いました。

これまでチラシを渡した中にも、その人と同じように自分の息子とかに見せたくない人もいたろうけど、多分それを僕に言わずにチラシを受け取った人も多くいたのではないのでしょうか。だから「受け取らない」という意見を言ってもらって、僕はわりと嬉しかったです。まあ、理解できないとは思ったのですが。

宮……確かに、理解できる・できないとは別のレベルでのコミュニケーションの在り方ですよ。

川……でも、本当に親心みたいなのってあるなとも思っています。実際、僕が家族にゲイだということをカミングアウトした時も、母親が一番驚いていて、何か病みみたいな感じだと思ってしまって。

宮……病気というのは、悩んでいる姿を見て病気と思ったのはなくて…。

川……そうではなくて、ゲイとか同性愛とかが治るものかと思っていたみたいです。「大丈夫だよ。治るから」と言われて。「でも、治るってもんじゃないよな」って…。

しかし、自分がカミングアウトしたり、映画を作ってゲイだと公表したりしていくと、ダイレクトに正直な反応が伝わる部分というのはすごく大きくて、それを大事にしたいなと思っています。もしかしたら、そういう反応のために映画を作るというところもあるかもしれ

れないです。

ある種、衝突ではないですけど、理解できないことに気付けるというのは、やはりこの映画を作って本当に良かったと思っています。

コメディの強み

宮……今の時代、価値観の変化が急速に進んで、みんな多かれ少なかれ時代の流れについていけないところがあって、それが閉塞感につながる部分もある気がします。今までの当たり前だと思われていた価値観を覆すようなテーマで映画を作る時に色々な伝え方があると思うのですが、『ボクらのホームパーティー』の持つコメディ的な要素は色々な反応を引き出しやすいという強みがあるのではないのでしょうか。

川……どうしてもやっぱりLGBTQとかクイアとかいった言葉が先行すると、「真面目に見なくては」とか、「真面目に考えなくては」とか、おそらく無意識的に構えてしまうのだと思います。しかし、別にみんながみんな真面目な映画だけを作らなくてはいけなわけではなくて、少し肩の力が入ってしまう、身構えてしまうというのがよくないなと思っています。構えてしまうとますますLGBTQとそうじゃない人との乖離が起きてしまう気がします。みんな同じ人間ですし、そもそも人間同士って理解できないものだと僕は思っています。ゲイ同士だって理解できないことは当然あります。

だから、完全に理解しようとして接してもらおうというのは無理ではないのでしょうか。みんな色々バラバラだし、そもそも違うのだからということを前提に、歩み寄っていくというコミュニケーションがいいと思います。

宮……『ボクらのホームパーティー』を見ていたら、うっかり笑っちゃったとかもありますよね。バラバラだけれど、その瞬間ふっと思いがけず距離感が近くなるという力がコメディのこの作品にはある気がします。

川……それで全然いいと思います(笑)。

宮……最後に視線のコミュニケーションと並行した、『ボクらのホームパーティー』の緊張と脱力のコミュニケーションの魅力を伺った気がします。本日は貴重なお話しをしていただき、ありがとうございました。